

カウンセラーに求められるパーソナリティと感情状態

—表情認知とジェンダー・他者意識・不安との関連性から—

川崎 哲生

板橋区立赤塚福祉園

要 約

本研究は、カウンセラーに求められるパーソナリティや感情状態を明らかにするための基礎的研究として、“表情認知の正確性”と“ジェンダー・他者意識・不安”との関連性について検討することを目的とした。224人の大学生男女に、「表情写真」、「ジェンダー尺度（共同性・作動性尺度、BSRI）」、「他者意識尺度」、「STAI」を呈示し、回答を求めた。その結果、生物学的に女性である者、他者意識尺度の下位尺度である外的他者意識の高い者、不安の低い者は、そうでない者より表情認知が正確であった。また心理的に女性性の高い者、他者意識尺度の下位尺度である内的他者意識・空想的他者意識の高い者は、そうでない者より表情認知が正確でなかった。さらに他者意識と不安が表情認知に及ぼす影響の仕方は、生物学的な男性と女性で違うことが明らかになった。以上のことから、カウンセラーに求められるパーソナリティとして外的他者意識が高いこと、カウンセラーに求められる感情状態として不安が低いことが重要であることが示唆された。

【Key word】 表情認知 ジェンダー 他者意識 不安

I 問題と目的

1. 臨床場面における非言語

近年、心理臨床場面において非言語の重要性が認識されている（谷山ら、2005；吉川、1999）。菅野（1987）はクライアントの無意識の欲求や願望が非言語的行動によって表出されていることがあると述べている。そのためカウンセラーは非言語を的確に把握することが求められている。

2. 表情の普遍性と文化差

人には7つの基本的感情（喜び、驚き、恐れ、嫌悪、怒り、悲しみ、のちに軽蔑が追加された）があり、それぞれを示す特定の表情を人は普遍的に持っているとして（Ekman、2003）。しかしその一方

で、どの場面でどの表情をするべきかは文化によって異なる（表示規則）とされている（Ekman、2003）。

3. 表情認知の性差

（1）生物学的な性差

Hall（1978）は他者の非言語の理解においては男性より女性の方が優れているとしている。しかしその一方で、表情の強度や注視時間において性差は出ないという研究もある（尾田、2004；小松ら、2008）。

（2）表情認知へのジェンダーの影響

稲嶺・遠藤（2009）はジェンダータイプが表示規則を作る1つの要因として考えられるとしている。また斉藤（1994）は他者の情動を判断する時の正確さはジェンダー

と関係があるとしている。このように、ジェンダーは表情の表示規則や非言語の解読と関連があることが示唆されており、表情認知の正確性とジェンダーには関連性がある事が予想される。

4. 表情認知への他者意識の影響

他者意識は共感性と弱い相関関係にある(氏家、2011)。共感性と表情認知を同義として捉えることには問題があるが、両者はとても近い概念とも捉えられる。従って他者意識と表情認知には関連性があることが予想される。また下位尺度である外的他者意識の高い人は表情を手掛かりとして感情の認知を行いやすいことが明らかになっている(吉岡ら、1988)。これらの事から他者意識と表情認知の正確性には関連があることが予想される。

5. 表情認知への感情の影響

越川・向後(1996)は不安が表情認知に影響を与える事を明らかにしている。またMohlman et al.(2007)もこの点について研究し、表情の処理が不安と密接に関わる可能性があるとして述べている。これらのことから表情認知の正確性に不安という感情が影響を与えていることが明らかにされており、高不安者の方が低不安者より表情認知が正確でない事が予想される。

6. 目的

これらを踏まえ、以下の4つを仮説として検討することを本研究の目的とする。

- ① 表情認知は生物学的な性差があり女性の方が男性よりも表情認知が正確である。
- ② 表情認知はジェンダーという心理的な性度が影響しており、女性性の高い者の方が低い者よりも表情認知が正確であ

る。

- ③ 表情認知は他者意識による影響を受け、他者意識が高い者の方が低い者よりも表情認知は正確である。
- ④ 表情認知は不安による影響を受け、不安が低い者の方が高い者よりも表情認知は正確である。

これらを明らかにする事が、カウンセラーに求められるパーソナリティと感情状態についての示唆が得られることに繋がると思われる。

II 方法

1. 対象者

4年制大学で心理学関連の科目を受講する大学生及び臨床心理学を専攻する大学院生を対象に質問紙調査を行った。対象者数は238人であり、そのうち有効回答数は224人(男性86人、女性138人)であった。

2. 調査時期

2012年7月から10月に大学内の教室において調査を実施した。

3. 調査用具

(1) 表情刺激図版

表情写真(Ekman、2003)

使用した写真は14枚、表情は悲しみ、嫌悪、怒り、恐れ、喜び、驚き、軽蔑の7種類。回答方法は悲しみ、嫌悪、怒り、恐れ、喜び、驚き、軽蔑の選択肢から選択させた。

(2) 測定尺度

- ① 共同性・作動性尺度(土肥・廣川、2004)
- ② BSRI日本語版尺度(東、1990；1991)
- ③ 他者意識尺度(辻、1993)

④ STAI日本語版尺度（清水・今榮、1981）

4. 分析

PASW Statistics 18を用いて、逆転項目を処理して共同性・作動性尺度、BSRI日本語版尺度、他者意識尺度、STAI日本語版尺度（状態 - 特性不安検査）の各尺度得点を求め、尺度得点から全体の上位25%を高群、下位25%を低群として抽出した。そして、その高群と低群の表情認知得点の平均値をt検定を用いて分析し、関連性を検討した。

Ⅲ 結果

1. 性別と表情認知のt検定

性別によって表情認知の得点に差があるかを調べるために、男性と女性の表情認知得点の平均値についてt検定を行った。その結果、全表情合計得点におけるt検定で有意確率0.02で有意差がみられ、女性の方が平均値が有意に高かった。一方、喜びの表情得点におけるt検定で有意確率0.01で有意差がみられ、男性の方が平均値が有意に高かった。

2. 外的他者意識と表情認知のt検定：男女

外的他者意識尺度得点の高低によって表情認知の得点に差があるかを調べるために、外的他者意識尺度得点の高群と低群を抽出し、両者の表情認知得点の平均値についてt検定を行った。その結果、悲しみの表情得点におけるt検定で有意確率0.04で有意差がみられ、高群の方が平均値が有意に高かった。一方、軽蔑の表情得点におけるt検定で有意確率0.08で有意傾向がみられ、高群の方が平均値が有意に高かった。

3. 状態不安と表情認知のt検定：男女

状態不安尺度得点の高低によって表情認知の得点に差があるかを調べるために、状態不安尺度得点の高群と低群を抽出し、両者の表情認知得点の平均値についてt検定を行った。その結果、怒りの表情得点におけるt検定で有意確率0.06で有意傾向がみられ、低群の方が平均値が有意に高かった。

4. 特性不安と表情認知のt検定：男女

特性不安尺度得点の高低によって表情認知の得点に差があるかを調べるために、特性不安尺度得点の高群と低群を抽出し、両者の表情認知得点の平均値についてt検定を行った。その結果、怒りの表情におけるt検定で有意確率0.08で有意傾向がみられ、低群の方が平均値が有意に高かった。

5. 状態不安と表情認知のt検定：男性

状態不安尺度得点の高低によって表情認知の得点に差があるかを調べるために、状態不安尺度得点の高群と低群を抽出し、両者の表情認知得点の平均値についてt検定を行った。その結果、怒りの表情におけるt検定で有意確率0.07で有意傾向がみられ、低群の方が平均値が有意に高かった。

6. 特性不安と表情認知のt検定：男性

特性不安尺度得点の高低によって表情認知の得点に差があるかを調べるために、特性不安尺度得点の高群と低群を抽出し、両者の表情認知得点の平均値についてt検定を行った。その結果、全表情合計得点におけるt検定で有意確率0.01で有意差がみられ、低群の方が平均値が有意に高かった。一方、怒りの表情得点におけるt検定で有意確率0.00で有意差がみられ、低群の方が平均値が有意に高かった。

IV 考察

ここでは、得られた結果の中で有意差があったものを中心に考察を進めていく。

1. 性別による表情認知の違い

結果から、全ての表情は女性の方が男性よりも有意に得点が高く、女性の方が男性より表情の読み取り能力に長けているということが明らかになった。この結果はこれまでの研究 (Hall, 1978) と一致している。

一方、喜びの表情については男性の方が女性よりも有意に得点が高く、男性の方が女性より喜びの表情を正確に読み取ることができることが明らかになった。しかし、従来の研究では表情の性差は表情の種類によって異なり、喜びは女性の方が男性より正答率が高く、恐れは男性の方が女性より正答率が高いという結果 (二塚・尾田、2004) が得られている。この結果の差は研究で用いられた表情刺激の強度によるものと思われる。従来の研究は表情刺激の強度の高いものを用いているが、本研究では日常レベルで見られるような強度の低いものを用いている。このことから、日常で見られる表情においては男性の方が女性よりも正確に喜びの表情を読み取ることができると示唆された。以上のことから、部分的には支持されなかったものもあるが、大部分では仮説 1 は支持された。

2. 他者意識による表情認知の違い

(1) 男女混合のデータにおける外的他者意識について

次に男女混合のデータにおける外的他者意識の高低による表情認知の違いについて述べる。結果をみると、男女混合のデータでは、悲しみの表情と軽蔑の表情に有意差

がみられており、どちらの表情も高群の方が平均値が高かった。この結果は、吉岡ら (1988) が明らかにした、外的他者意識の高い人は表情を手掛かりとして他者の感情を認知しやすいという結果に由来するものと思われる。外的他者意識の高い者は低い者より表情などをよく観察しやすいため、表情を読み取る機会が増え、その結果が本研究に表れていると思われる。以上のことから外的他者意識は表情認知の正確性にプラスの影響を与えることが明らかになり、仮説 3 は支持された。

3. 不安による表情認知の違い

(1) 男女混合のデータにおける不安について

まず男女混合のデータにおける不安の高低による表情認知の違いについて述べる。結果をみると、男女混合のデータでは、状態不安と特性不安の両方において怒りの表情に有意差がみられており、どちらも高群の方が平均値が低かった。これは従来言われてきた不安という感情が表情認知に影響を及ぼすという結果と一致している。つまり、本研究で得られた結果は、不安という感情が認知にバイアスをかけている事を示唆している。

渡辺・望月 (2007) は他者の表情を見ることは自身の感情を喚起させることにもなるとしている。そして、その感情も表情の解釈に影響すると述べている。さらに渡辺・望月 (2007) は被検者が表情から不快感を得たときはその表情に嫌悪の感情が含まれていなくても、嫌悪の感情として解釈することを明らかにしている。つまり、不安の高い者はニュートラルな表情やネガティブな表情を見ると、ネガティブな感情を

喚起させやすいということである。また北村（2006）によると曖昧な表情刺激を自己の気分状態にひきつけて認知するという気分一致効果がみられるとしている。これらを合わせると、不安の高い者は表情刺激を見て、不安を喚起させやすく、その喚起された不安と一致するような感情カテゴリーに表情刺激を分類しやすいということになる。

怒りの感情は7つの感情の中で最も強い感情であり、攻撃性と強く関連するものである。従って前述したように、性格的に普段から不安を感じやすい者は怒りの表情を見た時が最も不安になると考えられる。そのため不安状態が喚起される可能性もより高くなると考えられる。その結果、喚起された不安によって表情判断にバイアスをかけ、怒りの表情を自分の不安と一致するような感情（恐れや驚きなど）として誤認識してしまうのではないかと考えられる。

また、異なった視点から解釈をすることもできる。Sarason（1960）は高不安者は自分の不安・緊張への注意が高まり、その不安解消に多くの労力を費やし、その結果、課題への集中を欠き、結果として表情認知の正確性は低くなると述べている。Wine（1971）によればサラソンの説は課題が評価的あるいは自我驚異的である場合に関して妥当であるとされている。これに前述した渡辺・望月（2007）の見解を加えれば、高不安者は表情（特に怒りなどの自我驚異的な表情）を見て不安が喚起されやすく、その不安を解消しようとして課題に集中できなくなり、結果として表情認知が正確でなくなると考えられる。

以上のことから、何らかのメカニズムに

よって表情認知は不安が高いと正確でなくなるということが明らかになり、仮説4は支持された。

（2）男女別々のデータにおける不安について

次に男女別々のデータにおける不安の高低による表情認知の違いについて述べる。性別ごとに不安の高群と低群と抽出し、それらの表情得点をt検定で比較した結果、男性においては有意差がみられたものがあったが、女性では有意差がみられなかった。男性群におけるt検定の結果は、状態不安・特性不安ともに怒りの表情に有意差がみられ、どちらも高群の方が低群よりも平均値が低かった。また特性不安は全ての表情との有意差もみられ、これも高群の方が低群よりも平均値が低かった。この結果は表情認知における不安の影響においても性差はみられるということを示している。つまり、男性は不安と表情認知に関連性があるが、女性には不安の表情認知に関連性がないということである。一般に、女性は男性よりも情緒が豊かであり、感情の起伏は大きいものと言われている。それならば男性の方が不安の影響を受けづらく、女性の方が不安の影響を受けやすいとも考えられる。しかし、本研究の結果は全く逆のことを示しており、表情認知に与える不安の影響のメカニズムに性別による何らかの違いがある可能性が示唆された。この点については、表情認知に与える不安の影響のメカニズムについての今後の研究で明らかにされるべきであると思われる。以上のことから、仮説4は支持された。

4. 総合考察

（1）各考察のまとめ

本研究では、表情認知の正確性とジェンダー、他者意識、不安との関連性について検討した。その結果、仮説4は全面的に、仮説1は大部分において、仮説3は部分的に支持され、仮説2は支持されなかった。これらの支持された仮説の中で、特筆すべき結果は、外的他者意識は表情認知の正確性にプラスに影響し、不安はマイナスに影響しているという結果である。以下に得られた結果からカウンセラーとして求められることについて論じる。

(2) カウンセラーに求められること

① カウンセラーに求められる他者への態度

カウンセラーにとって表情を正確に読み取ることがどれだけ重要であるかは1章で述べた通りである。本研究で得られた結果によると、外的他者意識が表情認知の正確性にプラスの影響を与えていることが明らかになった。従って、カウンセラーはクライアントにとってより良いカウンセリングを行うために、外的他者意識、具体的には、外見、服装、しぐさ、表情などを常に観察するように意識することが求められるのではないだろうか。また内的他者意識についての結果から、表情やしぐさについては、その意味を推測することに意識を向け過ぎるとかえってマイナスの影響を及ぼす可能性もあるので観察するに留まるのが最も良いと考えられる。そういった意味では、観察する機会を多く持つこと、つまり社交性がカウンセラーに求められるとも言えるかもしれない。

② カウンセラーに求められる感情状態

本研究で得られた結果によると、不安が表情認知の正確性にマイナスの影響を与え

ていることが明らかになった。従って、カウンセラーは安定した感情状態でカウンセリングに臨むべきであると言える。初回面接や、まだクライアントと会って間もない段階ではカウンセリング場面は緊張感が張り詰めている。その緊張感は当然カウンセラーも感じ、カウンセラー自身も気持ちが高ぶるものである。しかし、本研究で得られた結果によれば、そのような状態ではクライアントにとってより良いカウンセリングを提供することを妨げてしまう。それを防ぐためにもカウンセラーはクライアントとなるべく早く関係性を築くなどの努力をし、安定した感情状態でカウンセリングに臨むべきであろう。

今後も非言語の読み取り能力の影響要因を検討し、カウンセラーがクライアントにとってより良い支援を提供するための研究をする必要があると思われる。

(3) 今後の課題

今後の研究の課題としては、まず研究で使用した表情写真の問題が挙げられる。本研究で使用した写真は日常でみられるレベルの比較的強度の低い写真である。そのため、正答率が著しく低いものが多く、20%程度の正答率が多かった。その一方で、著しく正答率が高いものもあり、その割合は95%程度であった。これまでも表情認知の研究において、表情の種類によって、その正答率にバラつきは見られているが、本研究ではその差が大き過ぎたため、使用した表情写真に課題があると思われる。また、使用した写真の性別が女性のみであったこと、外国人であったことも本研究の課題であると思われる。これらの点については、本来は男女両方の写真が収録され、かつ日

本人の写真が最も良いと思われるが、日本で作成された刺激写真には本研究の目的に合ったものが見当たらなかった。使用する表情写真については多くの研究で、問題が指摘されており、表情の刺激強度、性別、人数、国籍などを考慮した一般化された表情刺激の作成が急務であろう。

付記

本論文は跡見学園女子大学大学院人文科学研究科臨床心理学専攻の平成24年度修士論文をもとにまとめたものである。ご指導いただきました野島一彦教授に厚くお礼申し上げます。

引用・参考文献

東清和 (1990) : 心理的両性具有 I—BSRI による心理的両性具有の測定. 早稲田大学教育学部学術研究 (教育・社会教育・教育心理・体育学編), 39, 25-26.

東清和 (1991) : 心理的両性具有 II—BSRI 日本語版の検討. 早稲田大学教育学部学術研究 (教育・社会教育・教育心理・体育学編), 40, 61-71.

土肥伊都子・廣川空美 (2004) : 共同性・作動性尺度 (CAS) の作成と構成概念妥当性の検討—ジェンダー・パーソナリティの肯否両側面の測定—. 心理学研究, 75, 420-427.

Ekman P (2003) : Emotions Revealed. Time Books.

Hall JA (1978) : Gender effects in decoding non-verbal cues. Psychological Bulletin, 85, 845-857.

稲嶺麻希子・遠藤光男 (2009) : 感情の表

情表出における状況と性別の効果—日本人大学生での検討—. 感情心理学研究, 17(2), 134-142.

北村英哉 (2006) : 表情認知の気分バイアスと誤再認. 日本社会心理学会第47回大会発表論文集, 366-367.

小松 佐穂子・箱田 裕司・川畑 秀明 (2008) : 表情認知の性差と生涯発達—集団式表情認知検査課題を用いた検討—. 九州大学心理学研究, 9, 9-18.

越川房子・向後礼子 (1996) : 否定的評価に対する不安が表情認知に与える影響. 日本教育心理学会総会発表論文集. (38), 269.

Mohlman J, Carmin N & Price RB (2007) : Jumping to interpretations : social anxiety disorder and the identification of emotional facial expressions. Behavior research and therapy, 45, 591-599.

二塚亜実・尾田政臣 (2004) : 顔面表情の表出と認知に関する実験的研究 : 性別と非言語的表出性の効果について. 電子情報通信学会技術研究報告. HIP, ヒューマン情報処理, 104 (450), 93-98.

尾田政臣 (2004) : 表情認知の生得性についての検討. 電子情報通信学会技術研究報告. HIP, ヒューマン情報処理, 104 (450), 99-104.

斎藤耕二 (1994) : 他人の感情を理解する. 菊池章夫・堀毛一也 (編). 社会的スキル心理学. 川島書店, pp41-43.

Sarason I (1960) : Emotional findings and

- theoretical problems in the use of anxiety scales. *Psychological Bulletin*, 57, 403-415.
- 清水秀美・今栄国晴 (1981) : STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORYの日本語版 (大学生用) の作成. *教育心理学研究*, 29(4), 62-67.
- 菅野純 (1987) : 心理臨床におけるノンバーバル・コミュニケーション. 春木豊 (編). *心理臨床のノンバーバル・コミュニケーション*. 川島書店, pp 45-90.
- 谷山牧・甲斐一郎・高橋都 (2005) : 医療面接時の医師の非言語行動が与える影響-模擬心療場面ビデオの作成と内容妥当性の評価-. *医学教育*, 36, 177-183.
- 辻平治郎 (1993) : 自己意識と他者意識. 北王子書房.
- 氏家悠太 (2011) : 共感と社会的スキルとの関連性—empathizing-systemizing理論による個人差の検討—. *日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集*, (20), 67.
- Wine J (1971) : Test anxiety and direction of attention. *Psychological Bulletin*, 76, 92-104.
- 渡辺桃子・望月登志子 (2007) : 非言語的コミュニケーション場面における顔の表情認知—複合的処理過程の提案—. *日本女子大学人間社会学部紀要*, 18, 87-97.
- 吉川真理 (1999) : カウンセリングにおける非言語的コミュニケーション. 澤田端也・吉田圭吾 (編). *キーワードで学ぶカウンセリング: 面接のツボ*. 世界思想社, pp210-221.
- 吉岡深雪・向山泰代・南山真美・辻平治郎・梅本亮夫 (1988) : 他者意識が感情と感情特性の認知に及ぼす影響 (3). *日本教育心理学会総会発表論文集*, (30), 418-419.